

【氏名】井上 周平

【所属】（助成決定時）東京大学大学院 総合文化研究科

【研究題目】

近世ドイツ都市の医療制度における医療家の立場とその役割ーケルンの理髪師組合を例にしてー

【研究の目的】

前近代ヨーロッパにおいて、医療行為は、専業・副業を問わず、さまざまな人々によって行われていた。その中で外科医療家の代表とされるのが理髪師である。彼らは、散髪や髭剃りだけでなく、骨折の治療や外傷のための膏薬作りなど、客の身体ケア全般を担っており、同職組合を形成し、成員の管理とその権益の保護を図っていた。この組合を通じての権益独占の試みの過程においては、一方で組合外の医療家との諍いが、他方で上位権力である都市政府（市参事会）との駆け引きが生じる。

本研究では、都市ケルンを具体例として、近世ドイツの都市社会において、理髪師がどのように組合を組織し、その組合を通じてどのように自らの生業の利権を主張し、守ろうとしていたのか、さらには市参事会の医療・衛生政策に対してどのような態度を取ったのか、という点を明らかにしていく。それにより、近世ヨーロッパを対象とした医療社会史研究に詳細な事例研究を提供し、中・近世都市における執政と市民の関係の問題に、統治される側の活動という視点の重要性を提示することを目的とする。

【研究の内容・方法】

本研究では、上述の目的を達成するために、(1) 理髪師組合の組織と制度、(2) 組合による利権の主張、(3) 都市の医療政策への関わり、という三つの側面から考察を行う。まず、組合の基本文書である規約や重要な案件に関する決議文書から、管理・運営の仕組みとその変容を解明する。また、会計文書から、新規加入者の受け入れや、成員間の政治的・経済的格差についても明らかにすることを試みる。次に、組合による医療における利権の主張に関しては、組合外の医療家の活動についての抗議・陳情および権益独占の主張を正当化するための成員の管理の二点について、決議文書や会計文書の分析を行う。第三に、都市の医療政策への関わりに関しては、中・近世ヨーロッパにおいて極めて大きな影響力を持った疫病であるペストの流行時に焦点を絞り、都市の政策に対する理髪師組合の反応を見ていく。

本研究においては、取り扱う史料の大部分が未刊行であるため、ケルン市立歴史文書館における調査が必要不可欠となる。調査の対象は、16世紀から17世紀にかけての理髪師組合に関する文書全般であり、文書館の目録に従えば、その数は30以上に及ぶ。手稿文書の読み取りと転写、当時のドイツ語の読解、そこから得られたデータの取りまとめと解釈という三段階の手順は必ずしも常に順番通りに進められ得るというわけではなく、読解やデータの取りまとめの段階で、文書のオリジナルもしくはマイクロフィルム複製を参照することになる。

【結論・考察】

以上のような計画に従って進められた一年間の研究成果として、以下の点を挙げておきたい。

まず、理髪師は手工業者としてのアイデンティティを持ち、他の手工業組合と同様の規定や組織を持っていた。16世紀半ば以降は、組合長の選挙日が固定され、また特定の人物が再選される割合が増えてくる。さらに組合長を経験した一部の親方が組合の管理や決議に関与することが常

態化し、こうした有力親方層とそれ以外の組合員のあいだに権力格差が生じた。

新規加入者の受入数については、分析対象の期間中に大きな変化は見られないが、時代を下るにつれ、加入料の上昇や出生証明書の提出義務など、受け入れ条件が厳格化するさまが見て取られた。よそ者の医療家に対しては、組合に必要な金額を納める限りでは、一時的にでも新規加入者と同等の扱いがなされたが、それが行われなかった場合には、組合の名において、市参事会に請願が行われ、介入が要請がされた。この点において、理髪師組合と、彼らを通じてよそ者の医療家の活動を管理可能としたい市参事会とのあいだには利害の一致があり、相互に利用し合う状況にあったように考えることができる。

手稿読解の難しさから、残念ながら助成期間中に予定していた問題点のすべてを検討することはできなかったが、引き続き、原史料およびマイクロフィルム複製に基づいて分析を進めていくことができるであろう。